奈良県立大学 ユーラシア研究フォーラム 2023

奈良でゾロアスター教

予稿集

日時：2023 年（令和５年）11 月 25 日（土）13:30－17:00
会場：奈良県立大学 3 号館 2 階多目的ホール

奈良県立大学 ユーラシア研究センター編

ナオジョテ―ゾロアスター教の入信式

パルヴェーズ・バジャーン
（アソーナン・マンダル神学校教授／ゾロアスター教神官）

【要旨】

いずれの宗教でも、その教えと哲学は特定の神学上の前提に基づいています。ゾロアスター教の場合、そうした前提の一つが、二つの世界――精神の世界と肉体の世界――が存在し、人は常に精神の世界とふれ合っていなければならないということです。そしてそのための基本となる手段が祈りと儀式です。ゾロアスター教徒は、祈りや儀式の前に、クスティ（kusti）という儀式を行わなければならないのですが、この儀式には、スドレとクスティ（Sudreh & Kusti）という精神的要素（ālāt）が必要になります。なぜならそれらは、ゾロアスター教信仰の大前提を満たす上で欠かせないものだからです。

ナオジョテ（Navjote）は、パールシーやイランの子どもがゾロアスター教に入信するための儀式であり、この儀式を経て、彼らはゾロアスター教徒としてコミュニティに受け入れられることになります。そのためこの儀式は、ゾロアスター教徒にとって最も重要なものと考えられています。

パールシーやイランの子どもは、男女を問わず、ナオジョテ（Navjote）という儀式を経験しなければゾロアスター教徒にはなれません。そしてこの儀式を終えた後は、祈りを捧げ、ゾロアスター教の慣習や規則を守ることが求められます。この儀式を、パールシーがナオジョテ（Navjote）と呼ぶのに対し、イランのゾロアスター教徒は’sedra-pushan’（「聖なるシャツを着ること」の意）と呼んでいます。

ナオジョテ（Navjote）という言葉は、二つの部分から成っています。「新しい」という意味のアヴェスター語’nava’と、「祈りを捧げる人」を意味する’zōt’（アヴェスター語で’zaota’）の2つで、これを合わせて、「新しく祈りを捧げる者」という意味になります。パールシーにとってこの儀式は、キリスト教徒の堅信（Confirmation）の儀式にあたるものです。

子どもが7歳になると、この入信の儀式が行われます。イランでは、この儀式に備えて、5歳から宗教教育を始めます。子どもがこの儀式について理解し、信徒としての責任を全うできるほど成長していない場合には、この儀式を延期することができます。ただし、必ず15歳までに済まさなければなりません。

スドレ（SUDREH）

ナオジョテ（Navjote）では、ゾロアスター教徒であることの目に見える証として、子どもにスドレ（Sudreh）という聖なるシャツとクスティ（Kusti）という聖なる紐を身につけさせます。そもそも、この聖なるシャツと紐は象徴的存在です。スドレ（’Sadreh’または’Sudreh’）という言葉は、「有益な衣服」を意味するアヴェスタ

一語の ’stēhēr - paesanghē’ という言葉に由来しますが、この言葉には「有利な道」という意味もあります。スドレ（Sudreh）は、’malmal’ と呼ばれる白い木綿生地を使って白い木綿糸で手縫いしたシャツです。白は純潔を表し、この色自体がマズダー信仰の象徴でもあります。そのためスドレ（Sudreh）は、パフラヴィー語（中期ペルシア語）では ’Vohumanig vastra’、つまり「善き心の衣服」と呼ばれているのです。

スドレ（Sudreh）は 9 つの部分に分けることができますが、最も重要なのは、ギーレバーン（’gireh-ban’、「結び目を入れておくこと」の意）で、これは、信仰に対する「忠誠、つまり信仰心」を表します。またこの部分は、「善行を入れておく袋」という意味の、’Kissēh-i-Kērfēh’ とも呼ばれています。パフラヴィー語で書かれた Shāyast-nē-Shāyast では、聖なるシャツは素肌に直に着なければならないとされているので、スドレ（Sudreh）は、生命の純粋性と善行を忘れないための象徴ということになります。他にもスドレ（Sudreh）には、ギルド（Girdeau）、2 つの袖、2 つの脇縫い部分、裾の 2 ヵ所に施した三角形の縫い目と直線の 1 つの縫い目があります。

クスティ（KUSTI）

スドレ（Sudreh）を素肌に纏うと、その上からクスティ（Kusti）という聖なる紐を腰に 3 回巻きます。クスティ（Kusti）は、羊毛の 72 本の糸を 12 本ずつに分けた 6 本の紐からできています。羊毛の糸で作られたクスティ（Kusti）は、純潔と純粋の象徴と考えられており、それを身につけた者に生命の純粋性を忘れさせないためのものです。クスティ（Kusti）は、「バラモンが肩にかけている聖紐」であるジャノイ（Janoi）や、フランシスコ修道会の神父が腰に巻いている縄のように、道徳上の戒めや信念を表しています。

聖なる紐を表すアヴェスター語の ’aiwyaonghana’ は、「体に巻く」という意味です。クスティ（Kusti）という言葉は、「方向または側(がわ)」を意味するパフラヴィー語の ’kust’ に由来します。ですからこの言葉は、「適切な方向または道を示すもの」という意味にもとれるでしょう。つまり、スドレ（Sudreh）（聖なるシャツ）が有利な道を、そしてクスティ（Kusti）（聖なる紐）は、その道を進むためにふさわしい方向を示しているわけです。ですからクスティ（Kusti）は、ゾロアスター教の側(がわ)にいる（ゾロアスター教を信仰している）人たちを見分けるためのしるしのようなものと言えます。

クスティ（Kusti）は、ゾロアスター誕生以前から象徴として存在したと言われています。これを最初に取り入れたとされているのはピシュダディアン王朝のジャムシード王で、予言者ゾロアスターは、クスティ（Kusti）を身につけるというこの慣習を容認し、聖なるシャツの上からこれを巻き、祈りの言葉を唱えるよう命じたのでした。クスティ（Kusti）は、神に従い、罪には扉を閉ざし、破壊の力を打ち砕く意思を示すものです。したがって、ゾロアスター教徒は、入浴時を除き、常に聖なるシャツと聖なる紐を身につけていなければなりません。クスティ（Kusti）は一種の帯です。そして、「腰に巻く」あるいは「帯をしめる」ことを意味する ’kamar bastan’ は、転じて「奉仕の覚悟はできている、務めの準備はできている」ことを表します。つまり、

パフラヴィー語のテキストによれば、クスティ（Kusti）を腰に巻くということは、神に奉仕する準備ができているという意味になるのです。

クスティ（Kusti）は、悪神（アフリマン（ahriman））と聖なる神（Divine Host）を隔てる精神的バリケードや城壁に喩えられ、「すべての知の天使を守る全知の腰帯」と呼ばれています。

糸から作られたクスティには、次のようにさまざまな意味があります。

・クスティ(Kusti)は72本の糸で作られていますが、この糸の数は、ヤスナ(Yasna)という祈祷書の72章のことを表しています。クスティ（Kusti）を腰に巻いた敬虔なゾロアスター教徒は、ヤスナ（Yasna）の儀式を行うという功徳を行ったとされます。

・クスティ（Kusti）は、体の真ん中、つまり腰に巻かれることから、これを身につけた者は、中道を歩かなければならない、あるいは宗教上の教え、言葉、行いにおいて節度を守らなければならないことを意味します。

・4つの結び目を作ることは、クスティ（Kusti）を腰に巻いた信徒に、神は唯一無二の存在であって、創造主であること、ゾロアスター教は真の宗教であること、そしてザラスシュトラ（Zarathushtra）は神がこの世に送られた預言者であって、クスティ（Kusti）を身に着けた者は善行を施さなければならないことを思い出させます。

スドレ（Sudreh）を身にまとわずにクスティ（Kusti）を腰に巻くことは罪になります。なぜなら、クスティ（Kusti）は、素肌に直接触れてはならないからです（また、クスティ（Kusti）は、スドレ（Sudreh）の上から直接巻かなければなりません）。入浴時には、入浴中も守られるようにバージ（baj）（「祈り」の意味）を唱えながら、スドレ（Sudreh）を脱がなければなりません。

スドレとクスティ（Sudreh-Kusti）は、それを身にまとった者の心が悪によって汚されないように、その者を守ります。それは、マントラ（manthras）を唱えながらクスティ（Kusti）を腰に巻くことで、この世での私たちの存在という自然現象として、私たちの体の周りに電磁場が生まれるからです。この「エネルギー場」つまり「磁気回路」は、マントラ（manthra）を繰り返しながらクスティ（Kusti）を腰に巻くという儀式によってますます活発になるのです。

パフラヴィー語で書かれたダーデスターン・イー・デーニーグ（Dādistān-ī-Dēnig）（第39章）には、象徴としてのクスティ（Kusti）の意味について、次のようにかなり詳細に記されています。

その１ － 神は、その者が神に仕え、神の示した道を歩むことを願っている。

その２ － クスティ（Kusti）とは神への奉仕を示すしるしとしての帯であり、それを身につけることによって、人は、謙虚な気持ちで神の前に立ち、その命令を聞かなければならないことを忘れない。

その３ － クスティ（Kusti）は雨戸のようなものであり、それを身につけた者の心に悪が入りこむのを防ぎ、その者の純粋な考え、言葉、行いが汚されないようにするための帯である。

その４ － クスティ（Kusti）は、それを腰に巻くことによって、気高い志を持たなければならないことに気づかせてくれる。すなわち、クスティ(Kusti)は、体の真ん中の腰に巻かれることで、帯、つまり一種の抑制装置の役割を果たし、私たちに、弱い気持ちに負けて、気高い志を失ってはならないことを思い出させてくれる。

ナーン（NAHN）（沐浴）

入信式の当日、入信する子どもは、身を清めるために、ナーン（Nahn）という沐浴を行います。そしてこの時、祈りを唱え、植物の世界と不死を意味するザクロの葉を噛まなければなりません。また、'Nirang'（白い雄牛の聖なる尿）を３回飲まなければなりません。沐浴を済ませた子どもは、新しい白いパジャマを着て、sapat というペルシアのスリッパを履きます。そして上半身にウールのショールをかけ、トピ(topi)という帽子をかぶります。その後、その子どもは神官らと一緒に dias に連れていかれ、一段高い場所にある dias (patlo) に座らされます。この儀式で最も重要なのは、子どもに神の祝福を願うために招かれた、儀式を司る神官を含む５人の神官です。

入信式で子どもは東を向いて座らされます。絨毯の上には、次のものが必ず用意されます。

(1) 新品の聖なるシャツ（スドレ（Sudreh））と聖なる紐（クスティ（Kusti））など、その子どもが着用する新品の衣服が置かれたトレイ
(2) Akhiana と呼ばれる米が載ったトレイ
(3) 花が載ったトレイ
(4) 通常、加熱したバターの上澄みを燃料とするランプ
(5) 白檀と乳香が焚かれた吊り香炉
(6) 米,ザクロの粒,ブドウ,アーモンド,ココナッツのスライス数枚が載ったトレイ

最後のトレイに載せられたものは、繁栄を願って、最後に神官が子どもに振りかけます。

ナオジョテ（Navjote）―入信のための正式な儀式

この儀式の最初に、新しいスドレ（Sudreh）が子どもに手渡されます。そして、神官がパテート（Patet）という贖罪の祈りを唱え、入信する子どもはヤター・アフー・ワイリョー（Yatha Ahu Vairyo）を唱えます。

信仰の宣言：(Dīn-nō Kalmō)

入信する子どもは、儀式を司る神官の前に立ちます。この時、パイワンド(paiwand)という精神的一体感を築くための行為として、その神官は子どもの両手を取ります。そして、子どもに祈りを捧げるように促し、一緒に信仰の確認（ディン・ノー・カルモー、Dīn-nō Kalmō）を唱えます。その後、この神官は、子どもと一緒にアフナワール（Ahunawar）を一度唱えながら、子どもにスドレ（Sudreh）を首から着せます。これにより、その子どもは、外界の悪から身を守ってくれる、「善き心の衣服」を授かっ

たことになるわけです。

この後、儀式を司る神官は、叙唱と合わせ子どもと一緒に 'Nirang-i-Kusti' を唱えながら、聖なるシャツ（スドレ（Sudreh））の上からクスティ（Kusti）を巻いてやります。そして最後に、子どもが、信仰の告白を唱えます。これは、一生涯、マズダーを最高神とするゾロアスター教を信じることを宣言する、この儀式で最も重要な部分です。

信仰の告白：（Jasa mē avanghē Mazda）

「おお、マズダーよ。私を救いに来てください。私はマズダーを崇拝します。ゾロアスター教の信徒としてマズダーを崇拝します。私は、喜んでゾロアスター教を称え、ゾロアスター教を信じます。そして、善き考え、善き言葉、善き行いを称えます。マズダーを最高神とする善き宗教を称えます。なぜなら、この宗教は、口論や反目を防ぎ、同胞愛をもたらし、神聖であって、繁栄を誇る全ての宗教やこれから繁栄を築く全ての宗教の中で最も偉大で、最も素晴らしく、しかも最も優れた宗教として、アフラ・マズダーからゾロアスターに授けられたからです。私は、すべての善きことが、マズダーからもたらされていると信じています。どうか、マズダーを最高神とするこの宗教が称えられますように。」

入信した子どもは、自分の善き考え、善き言葉、善き行いが素晴らしい効果をもたらすことを信じるように言われます。パールシーは、自らの魂を救済するために、自分の内面が重要だということを信じなければなりません。自らの救済のためには、自分の考えや言葉、そして行いが純粋なものであるように注意を払う必要があるのです。ゾロアスター教が最も重視する道徳が守られているかどうかは、その人の考え、言葉、行いの三つがすべて善きものであるかどうかで決まるのです。

最後の祝祷：（Doā Tan-Dōrōsti）

子どもが、スドレ（Sudreh）とクスティ（Kusti）を身に纏い、信仰の宣言を唱えると、式を司る神官は、その子どもの額に kūmkūm という印をつけます。そして、子どもの首に花輪をかけ、ココナッツ、花、ビンロウの実、キンマの葉、キンマの実と氷砂糖を手に取るよう促します。神官は立ったままで祝祷（Tandorosti）を唱えながら、米、ココナッツ、バラの花びらをその子どもの頭上に散らします。最後に、神官全員が、その子どもの家族のために祝祷（Tandorosti）を唱えます。

参考文献

1. The Religious Ceremonies and Customs of the Parsees - J. J. Modi (1937)
2. Dādistān-ī Denīg - Ed. T. D. Anklesaria
3. Threads of Continuity - Parzor Foundation (2013)
4. Sudreh - Kusti - Pervin J. Mistry (2002)

Memo

Navjote Ceremony - Initiation into the Zoroastrian Faith

Ervad (Dr.) Parvez M. Bajan

【Abstract】

The teachings and philosophy of every religion are based on certain theological premises. One such premise of the Zoroastrian religion is the existence of two worlds - spiritual and corporeal and need for man to be constantly in touch with the spiritual world. Since prayers and rituals are the primary means to achieve this end, and before beginning any prayer or ritual, a Zoroastrian is enjoined to perform the kusti ritual which requires the spiritual implements (ālāt) of Sudreh & Kusti, hence they are the invariable requirements for fulfilling the basic premise of the Zoroastrian Faith.

The Navjote is the initiation of a Parsee / Irani child into the fold of the Zoroastrian religion, and marks his or her acceptance by the community. It is therefore considered the most important ceremony for a Zoroastrian.

It is mandatory for all Parsi / Irani Zoroastrian children, male and female, to pass through the Navjote and thereafter a child is responsible for the duty of offering prayers and observing religious customs and rules. While the Parsis refer to this ceremony as the Navjote, the Iranian Zoroastrians call this ceremony 'sedra-pushan' (putting on the sacred shirt).

The word Navjote is made up of two words - Avestā 'nava' meaning 'new' and 'zōt', Av. 'zaota', 'one who offer prayers', hence 'a new initiate who offer prayers'. The ceremony of Navjote amongst the Parsees corresponds to that of Confirmation ceremony of the Christians.

Seven is the age at which it is enjoined to initiate a child. The Iranians commence the religious education of their children at the age of five, which prepares them for this ceremony of investiture. If the child is not sufficiently intelligent to understand the ceremony and to know the responsibilities, the ceremony can be postponed to any age upto fifteen at which age, the investiture must take place.

SUDREH

The ceremony of Navjote consists of the investiture of the child with sacred shirt (Sudreh) and thread (Kusti) as visible symbol of Zoroastrianism. The sacred shirt and thread are symbolic in their structure. The word 'Sadreh' or 'Sudreh' comes from Avesta 'stēhēr - paesanghē' meaning 'useful clothing'. It also means 'an advantageous path'. The Sudreh is made up of white cotton fabric called 'malmal', hand stitched with white cotton thread. The white being symbolic of innocence, and as such, a

symbol of Mazdayasnan religion. For this reason, it is referred to as 'Vohumanig vastra', 'the vestment of good mind' in Pahlavi.

The Sudreh consists of 9 parts, the most important amongst them is the 'gireh-ban' lit. (that which preserves the knot) which signifies 'loyalty to, or faith', in the religion. It is also known as the 'Kissēh-i-Kērfēh' i.e. 'the purse or bag of righteousness'. The Pahlavi text Shāyast-nē-Shāyast enjoins that the sacred shirt should be worn next to the skin, thus, the Sudreh is a symbol that reminds one of purity of life and righteousness. The other parts of the Sudreh are Girdeau, two sleeves, two side seams and two triangular tiris (seam) at the ham and one straight tiri.

KUSTI

Upon wearing the Sudreh on the body, sacred thread called 'Kusti' is tied in three rounds around the waist. The Kusti is made up of lamb's wool and has 72 fine threads divided in six strands each of twelve threads. The Kusti being prepared from the lamb's wool is considered to be an emblem of innocence and purity and reminds its wearer to have purity of life. The Kusti symbolizes some moral precepts or ideas, just as the 'Janoi' or 'the sacred thread of the Brahmins' and the cord worn by the Franciscan Fathers round their waists.

The Avesta word for sacred thread is 'aiwyaonghana', lit. 'to gird round the body'. The word Kusti is its Pahlavi rendering from 'kust', meaning 'direction or side'. The word kusti may mean 'that which points out the proper direction or path'. Thus Sudreh (the sacred shirt) indicates the advantageous path and Kusti (the sacred thread) indicates the proper direction to proceed on that path. Therefore, Kusti is 'a badge distinguishing those who are on the side (who believe in) of Zoroastrianism

The Kusti is said to have existed as a symbol even before Zoroaster. It was King Jamsheed of the Peshdadian Dynasty who is said to have introduced it and Prophet Zoroaster has confirmed this previous custom of putting on the Kusti and also directed that it may be put on over a sacred shirt and with a recital of religious formula. The Kusti is a symbol of obedience to God and closing up the door against the sin and breaking up the power of destruction. It is therefore enjoined that except at the time of bathing, a Zoroastrian should always wear the sacred shirt and thread. A Kusti is a kind of belt, 'kamar bastan' to 'tie the waist' or 'to put on the belt' which means to be ready to serve, to be prepared for the work. Thus according to the Pahlavi text, putting on the Kusti on the waist symbolizes one's readiness to serve God.

Kusti is compared to a spiritual barricade and rampart between evil forces (ahriman) and Divine Host. It is referred to as the 'girdle of Omniscient Wisdom which has girded the all - intelligent angels'.

The woven kusti is rich in symbolism -

- The 72 strands from which the kusti is woven represent the 72 chapters of the Yasna. A Zoroastrian who ties his kusti with piety is said to have acquired the merit of performing the Yasna ritual.
- The kusti is held in the middle of the body and tied around the waist, signifying that the wearer should walk on the middle path or follow moderation in all worldly and religious thoughts, words and deeds.
- The tying of the four knots is meant to remind the wearer that God is One and He is the Creator, Zoroastrianism is the true religion, Zarathushtra is the Prophet sent by God, and that the wearer must perform good deeds.

It is sinful to wear a kusti without the sudreh, as the cord should not be tied touching the skin (there should also be nothing between the kusti and the sudreh). When a sudreh is removed while the wearer takes a bath, it must be taken off ceremoniously with baj (prayers) which protects the person during the bath.

The Sudreh-Kusti, protects its wearer spiritually from the evil influences is due to the fact that tying of Kusti with chants of manthras creates electro-magnetic field around us as a natural phenomenon of our existence on earth. This 'energy field' or 'magnetic circuit' are kept active and recharged by performance of kusti ritual with recitation of mānthra.

The Pahlavi text Dādistān-ī-Dēnig (Chapter 39) dwells at some length on the symbolic significance of the kusti.

Firstly - God wishes that man should serve Him and should follow His path.

Secondly - The kusti is a badge or belt of service and reminds the man that he stands before his superior with humility to receive His orders.

Thirdly - The kusti is a kind of shutter, a band, which prohibits outside evil influences to enter into his mind and affect the purity of his thoughts, words and deeds.

Fourthly - The kusti reminds one to have high idle of character before his mind. So, the kusti being tied on the middle portion of the body viz. the waist, and acting as a band or stopper, must remind us not to let the lower passion rise above and suppress our higher characteristics.

NAHN (sacred bath)

On the day of investiture, a child is made to go through a sacred bath, a kind of purification known as Nahn, when a child is made to recite a formula and asked to chew leaves of pomegranate which represents the plant world and immortality. The child is then made to drink 'Nirang' (a consecrated urine of albino) three times.

After this the child is bathed and made to wear a new pair of white pyjama and a pair of Persian slippers (sapat). The upper half of the child is covered with a woollen shawl and the head is covered with a topi (skull cap). Then the child is brought to the dias along with the Priests in procession and made to sit on the dias on a raised stand (patlo). The main investiture ceremony involves one officiating priest and four other priests who are invited to invoke blessings upon the child.

The child is made to sit facing the East. The following requisite things are placed on the carpet (1) a tray containing new set of clothes for the child including a new sacred shirt (Sudreh) and thread (Kusti) (2) a tray of rice known as Akhiana (3) a tray of flowers (4) a lamp, generally fed with clarified butter (5) fire, burning on the censer with fragrant sandalwood and frankincense (6) a tray containing mixture of rice, pomegranate grains, raisins, almonds and few slices of coconut, to be sprinkled later on by the priest over the child as a symbol of prosperity.

NAVJOTE - The investiture proper

At the onset of the ceremony, the new sudreh is placed in the child's hand and the priest recite the 'Patet' or the atonement prayer and the child generally recites Yatha Ahu Vairyo prayer.

Confirmation of Faith : (Dīn-nō Kalmō)

The child is made to stand before the officiating priest when the hands of the child are held by the priest, thus forming a paiwand or ritual unification. The priest leads the child into prayers and they both chant the Confirmation of Faith (Dīn-nō Kalmō). Thereafter, the officiating priest and the child together recite one Ahunawar when the priest ceremoniously puts on the sudreh on to the body of the child through the neck. The child is thus invested with the 'garment of the good mind' which protects the child from extraneous evil influences.

Thereafter, the officiating priest along with the child recites the 'Nirang-i-Kusti' with the preliminary introduction accompanied with the girdling of the kusti by the priest over the sacred shirt (sudreh) and the final recital of the Article of Faith which is the most important pronouncement by the child to be a follower of Mazdayasnan Zarathustrian religion throughout his / her life, till death.

Article of Faith : (Jasa mē avanghē Mazda)

"O Mazdā ! Come to my help. I am a worshipper of Mazdā. I am a Zoroastrian worshipper of Mazdā. I agree to praise the Zoroastrian religion and to believe in that religion. I praise good thoughts, good words and good deeds. I praise the good Mazdayasnān religion which curtails discussions and quarrels, which brings about kinship of brotherhood, which is holy, and which, of all the religions that have

yet flourished and are likely to flourish in the future, is the greatest, the best and the most excellent, and which is religion given by Ahurā to Zoroaster. I believe, that all good things proceed from Mazdā. May the Mazdayasnān religion be thus praised."

A child is made to believe in the efficacy of one's own good thoughts, words and actions. A Parsee has to believe that, for the salvation of his soul, he has to look to himself. For his salvation, he has to look to the purity of his thoughts, words and deeds. The pivot on which the whole of the moral structure of Zoroastrianism turns, rests upon this triad of thought, word and deed.

The Final Benediction : (Doā Tan-Dōrōsti)

After the sudreh and kusti are worn, and the declaration of faith recited, the officiating priest puts a kūmkūm mark on the forehead of the child. The child is then garlanded and made to hold a coconut, flowers, areca nut, betel leaf, betel nut and sugar candy. The priest now stands and recites the Tandorosti (benediction). While reciting, he showers a mixture of rice, coconut and rose petals over the head of the child. In the end, all priests together pray the Tandorosti for the family.

****

R E F E R E N C E S

1. The Religious Ceremonies and Customs of the Parsees - J. J. Modi (1937)
2. Dādistān-ī Denīg - Ed. T. D. Anklesaria
3. Threads of Continuity - Parzor Foundation (2013)
4. Sudreh - Kusti - Pervin J. Mistry (2002)

Memo

中央アジアの宗教における火の重要性―パミール地方を例に

キャミラ・マジュルノーヴァ
（タジキスタン国立古代博物館職員）

【要旨】

タジキスタンには、火にまつわるさまざまな風習や伝統があります。たとえば、北部のアイニやゴンチなどでは、花嫁が新居となる花婿の家に入る前に、その家に3回つれていかれ、中庭を3周しなければならないという儀式が今も行われています。こうした火にまつわる風習のほとんどは、タジキスタンの辺境に位置する地域、特にパミール地方に今も残っています。この地方には、火に関するいくつかの興味深い事実が記録に残されており、火にまつわる風習や伝統が数多く残されています。たとえば、ナウルーズ（Navruz）の前にはalovparakが行われます。この日、人々は、夜明けから正午までの間に家の前で薪を集め、それを使って家の中で火をおこします。そして火がつくと、“Zardī-i rūyamro bigir, surhī-i rūyamro bideh”（私の黄色い顔色を赤く染めてください）と繰り返し唱えます。“Zardī-i rūyamro bigir”とは、すべての心配事や苦しみ、悲しみを消し去り、不幸ではなく、幸せと喜びをもたらしてくれることを意味します。また他には、火をおこしてその中に布きれを投げ入れ、“baloho raft”（悪霊よ、退散せよ）と唱える、という風習もあります。こうした風習は数日間続くとされています。

パミール地方では、Alovparakはナウルーズ（Navruz）の象徴です。他にも火にまつわる風習としては、ラマダンやクルバンの最後の数日間に家庭や公共の場で行われる、“charoqakmonī”や“tsirovakded”があります。かつてパミール地方では、どこの村でもCharoqakmonīが行われていましたが、今では、Khohdara Valleyなどのわずかな地域でしか見ることができません。この日、人々は枝や藁で人形を作り、紐や布でくくり、完全に乾くまで吊しておきます。夜明けから正午になるまでの間に、各家庭では1人か2人の男性が、たいまつ(火のついたパンの切れはし)と人形を持って出かけていきます。そして小さな穴を掘ってその中に人形を置き、“serbahra shawed”（人形の首をはねてくれ）と唱えます。Charoqakmonīという風習は、火にまつわる風習としては最も古いものの1つであり、イスラム教が誕生する以前から行われていました。

ゾロアスター教では火は神聖なものとされ、各家庭には必ず炉床がありました。人々は、炉床で火をおこすと、礼拝の儀式を行いました。なぜなら、この儀式を屋外で行うことが許されなかったからです。パミール地方の家庭では、今も暖炉が神聖な場所と考えられています。この地方には、ゾロアスター教に由来する火にまつわる風習や伝統が数多く残っています。現在、パミール地方の住民のほとんどはイスラム教徒やイスマイリ派の宗徒ですが、彼らの火にまつわる風習や伝統には、今もなおゾロアスター教の影響が色濃く残っています。

Memo

The Importance of Fire in the Central Asian Region (in the Example of the Pamir Region)

Kamila Majlunova

【Abstract】

In the territory of Tajikistan, there are many customs and traditions associated with fire. For example, in the northern regions, such as Ainī and Ghonchi, a ritual is performed where the bride is taken to the groom's house three times before entering the house, and they must circle the courtyard three times. This ritual is still practiced by the locals. Most of the fire-related customs and traditions are now found in the remote regions of Tajikistan, particularly in the Pamir region. Some interesting facts about fire in the Pamir region have been recorded. In Pamir, there are many fire-related customs and traditions. One of them is called "alovparak," which is performed before Navruz. On this day, after the sunrise and before noon, everyone goes to the front of their house and gathers firewood. They then bring the firewood inside their homes and start a fire. While lighting the fire, they recite the phrase "Zardī-i rūyamro bigir, surhī-i rūyamro bideh" (Turn the yellow color of my face into red). "Zardī-i rūyamro bigir" means to remove all the worries, pains, and sorrows from oneself, to not bring any negativity, and to bring happiness and joy to oneself. Another custom is that when lighting the fire, they throw a piece of cloth towards the fire and say "baloho raft" (bad spirits leave). It is said that these customs are performed for several days.

Alovparak is a symbol of Navruz in Pamir. Another fire-related custom is called "charoqakmonī" or "tsirovakded", which is performed during the last days of Ramadan and Qurban in homes and public places. Charoqakmonī has been practiced in all the villages of Pamir in the past, but now it is only found in some remote areas, such as the Khohdara Valley. On this day, people make small dolls out of dry branches of trees or straw and tie them with a rope or cloth. After making them, they hang the dolls until they dry out completely. After the sunrise and before noon, one or two men from each household go to the fields or gardens with a torch (a piece of burning bread) and the dolls. In the fields, they make a small hole and place the dolls there. Then they recite the phrase "serbahra shawed" (behead the dolls). Charoqakmonī is one of the oldest fire-related customs and has existed even before the advent of Islam.

In Zoroastrianism, fire was considered sacred, and every house had a hearth. They would light the fire in the hearths and perform worship rituals that were not allowed to be performed outside their homes. In Pamir homes, fireplaces are still considered sacred places. Until now, among the Pamiri people, there are many customs and

traditions related to fire that are rooted in Zoroastrianism. Although most people in Pamir are Muslims and followers of the Ismaili sect, their fire-related customs and traditions are still strongly influenced by Zoroastrianism.

Memo

火の道

青木　健
（静岡文化芸術大学文化・芸術研究センター教授）

【要旨】

本発表の趣旨は、嘗てイラン系民族が足跡を記したユーラシア大陸の中で、彼らの痕跡を辿り、それが古代日本まで到達している可能性があるかどうかを検討することである。話しの順序として、イラン系民族の「足跡」の具体的内容から始めよう。

一般に、イラン系アーリア人とインド系アーリア人が分離する以前の紀元前 2000 年紀の彼らの原始宗教は、「イラン・インド系民族宗教」として括られる。そのイラン・インド系の民族宗教では、しばしば聖火の崇拝が行われていた。現在その痕跡が最も顕著なのは、インド系民族宗教であるヒンドゥー教の「アグニ・ホートラ祭」、或いはヒンドゥー教から派生した仏教の一種である密教の「護摩（ホーマ）」である。

一方、最大のイラン系民族宗教であるゾロアスター教の間でも「ヤスナ祭式」が行われており、クルド人のヤズィード教でも聖地ラリシュで拝火儀礼が行われている。ここまで時代が下ったあともなお共通項を維持していると云うことは、イラン・インド系民族宗教から派生した諸宗教の儀礼面での特徴の最大公約数が、「拝火儀礼」と言えそうである。

このイラン・インド系の民族宗教は、セム的一神教のような聖典中心型の宗教、組織宗教を形成したことが殆ど無い。良く言えば時代と状況に応じてダイナミックに変容してきたし、悪く言えばアモルフな不定形のままに留まった。19 世紀以降の学問体系の中では、同じ「宗教」の名の下に分類されるイラン・インド系民族宗教とセム的一神教であるが、質的には両者の間にかなりの懸隔がある。セム的一神教基準でイラン・インド系民族宗教を分析するのは、時々誤解を生む元になっているような気がする。

このように、発表者は、イラン・インド系の民族宗教を特徴付ける紐帯は、教義や組織ではなく、儀礼――特に拝火儀礼――にあると思う。そして、明確な教義を伴わない拝火儀礼は、セム的一神教のイスラームなどと両立できるので、その習慣自体は近現代まで存続が可能だった。我々は、このような痕跡を発掘することによって、嘗てユーラシア大陸に存在したであろう「火の道」を復元することが出来る。

以下では、ユーラシア大陸の過半に当たる地域で活動したイラン系民族が残した拝火儀礼の痕跡として、

・5 世紀～7 世紀のトビリシの拝火神殿遺跡

・数十年前まで実践されていたパキスタン・フンザのワヒー人の拝火儀礼

・現在でも実践されているタジキスタン・パミールの拝火儀礼

・7 世紀の寧夏回族自治区固原のソグド人墓の拝火儀礼の痕跡
の四つをご紹介しつつ、古代奈良の文化まで話しを広げていきたい。

Memo

The Path of Fire

Takeshi Aoki

【Abstract】

The aim of this presentation is to trace the footsteps made by the Iranian people on the Eurasian continent and examine whether those footsteps could have reached ancient Japan. First, I will start by clarifying what I mean by the footsteps of the Iranian people.

Primitive religions and beliefs believed by the Aryans in the 20th century B.C. before the separation of the Iranian-Aryan and Indo-Aryan populations are generally categorized as Iranian/Indian ethnic religions. These beliefs often involved the worship of the sacred fire. The most salient examples that still survive today are the Agnihotra ritual of Hinduism, an ethnic religion of the Indian people, and the Homa ritual of Tantric Buddhism, a type of Buddhism derived from Hinduism. Meanwhile, Zoroastrians, believers of one of the largest Iranian ethnic religions, still hold the Yasna ceremony, and the Kurdish people perform fire worship rituals in Lalish, a sacred place of Yazidism. Over thousands of years, these existing religions that have their roots in Iranian/Indian ethnic origin have maintained the common practice of fire worship rituals, which can be safely said to be the greatest common ceremonial factor of these religions.

These beliefs of Iranian/Indian ethnic origin have never developed into a scripture-centered, organized religion like Semitic monotheistic religions. To put it positively, this means that they have undergone dynamic transformations according to the times and situations, but it can also be said that they remained in an amorphous state without developing any further. Although these beliefs of Iranian/Indian ethnic origin and Semitic monotheism are categorized under the same term of "religion" in the 19th-century academic paradigm, there seems to be a qualitative disparity between the two groups. I think that analyzing Iranian/Indian ethnic religions based on Semitic monotheistic standards may sometimes lead to misperception.

As described above, I believe that the commonality of Iranian/Indian ethnic religions lies not in their doctrines or organizations, but in their rituals, specifically, the fire-worship rituals. And precisely because such rituals were not associated with a strictly defined doctrine, they were able to coexist with Semitic monotheism like Islam, which was the key to the survival of their practice to date. We can restore the path of fire and trace how fire-worship rituals were transmitted across Eurasia by uncovering the buried footprints of the ancient Iranian people.

I would like to cite the following four examples as traces of fire-worship rituals

performed by the Iranian people who left their footsteps in various areas across Eurasia, covering more than half of the entire continent:

- Zoroastrian fire temple in Tbilisi (Georgia) dating back from the 5th to 7th century
- Fire worship rituals that used to be practiced by the Wakhi people in Hunza (Pakistan) until only several decades ago
- Fire worship rituals still practiced today in the Pamir Mountains (Tajikistan)
- Traces of fire worship rituals left at the Sogdian graves of the 7th century in Guyuan of the Ningxia Hui Autonomous Region (China)

In light of the above evidence of activities of the Iranian people, I will further examine whether they could have had an influence on the ancient Nara culture of Japan.

Memo

古代末期ゾロアスター教における魂の来世への旅路

キヤーヌーシュ・レザーニヤー
（ルール大学ボーフム教授）

【要旨】

霊魂、来世、死後の世界、天国、地獄という概念はゾロアスター教の基礎を成すもので、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教といったゾロアスター教とつながりのある宗教に影響を与えてきました。こうした終末論的な概念抜きにゾロアスター教について考えることはできないとも言えるでしょう。しかし、こうした概念は始めからゾロアスター教の概念領域に存在していたわけではなく、長い歴史的過程を経て形成されたものです。人間には霊魂が宿り、それが死後も消滅せず存在し続けるという思想は、紀元前 5 世紀半ばまでのギリシアの歴史において新しいものでした。現存する世界最古の宗教のひとつであるザラスシュトラの宗教（ゾロアスター教）も、これら思想の形成とほぼ同時期に同じような発達をとげています。死後、肉体から分離した自由な魂は来世に向かい、超越的な幸福に満ちた世界もしくは極悪の世界で生き続けるという思想が存在したことが、古代から受け継がれてきたゾロアスター教の資料に示されています。

古代末期に入ると、ササン朝（西暦 224～651 年）および初期イスラム時代（8～10 世紀）に編纂されたゾロアスター教教典に魂の死後の体験が詳細に描かれています。死後 3 日間死体のそばに一時的に留まる魂、来世に続く危険で恐ろしい道を辿っていく旅路、死者本人の魂が形となって表れた存在との出会いと会話、最後に橋を渡り、天国へと続く道を辿って善神であるアフラ・マズダーの住む世界に向かう者と地獄に落とされる者に分かれる様子が描かれています。本稿では、ゾロアスター教の書物をもとに、魂が来世に向かう旅路について概要を示し、中国および中央アジアで発見されたゾロアスター教の石棺に描かれている終末論的光景について論じていきます。

Memo

The Journey of the Soul to the Hereafter in the Late Antique Zoroastrianism

Kianoosh Rezania

【Abstract】

The notions of the soul, the hereafter, the afterlife, paradise, and hell are fundamental to Zoroastrianism and have influenced the religions in contact with it such as Judaism, Christianity, and Islam. To some extent, it is impossible for us to imagine Zoroastrianism without these eschatological notions. However, these concepts were not present in its conceptual field from the beginning, and their development was the subject of a long historical process. The idea that the human beings have a soul that survives the death was something new in Greek history in the mid of fifth century BCE. The religion of Zarathustra, one of the oldest living religions, shows a similar development more or less in the same period. The idea of a free-soul that leaves the body after the death and travels to the other world and stays in a transcendent beatific or devilish realm is attested in the Zoroastrian sources from the antiquity.

Coming to the late antiquity, the Zoroastrian texts from the Sasanian (224-651 AD) and early Islamic periods (8th-10th centuries) present a detailed picture of the soul's experiences after the death. This includes its stay near the body in a transitory state during the first three days after the death, its journey along a fearful and dangerous path to the hereafter, its encounter with the vision-soul of the person and conversation with this, and finally its passage over a bridge either to the paradise and a visit with Ahura Mazdā or its fall into the hell. This paper will present a general overview of the soul's journey to the hereafter in the Zoroastrian textual material and discuss the eschatological scenes depicted on the Zoroastrian sarcophagi found in China and Central Asia.

Memo

Suluzhi（苏鲁支）—中国におけるゾロアスター教の用語と それに関する新たな証拠について

張　小貴
（暨南大学歴史学部教授）

【要旨】

一般に、中世中国で広まった祆教（Xian Religion）は、古代ペルシアのゾロアスター教に起源を持つとされています。しかし、同時期に中国で広まったマニ教や景教とは対照的に、ゾロアスター教の聖典が中国語に訳されたことはありません。そのため、中国に伝播したこの宗教について詳しく知るには、教会以外の記録に頼らざるを得ません。中国の仏僧 Zan Ning（賛寧）は、その著書 Seng Shilue（大宋史略、宋時代における中国仏教の略史の意味）の中で、古代イランの予言者ゾロアスターのことを Suluzhi（苏鲁支）と呼んでいます。この古代イランの予言者については、言語によって呼称が異なります。たとえば、アヴェスター語（古代アヴェスター語でも新アヴェスター語でも同じ）では Zaraϑuštrā、パフラヴィー語では Zarduxšt、マニ教パルティア語では Zarhušt、ソグド語・ウイグル語では Zrušč、そしてギリシア語では Zōroastrēs（Zathraustēs、Zōroastēr、Zaratas および Zarades）と呼ばれています。この中で、中国語の Suluzhi と読み方がほぼ同じなのは、明らかにソグド語の Zrušč です。また、中国におけるゾロアスター教の予言者に関する情報については、ソグド語の文献に因るものにちがいないとも言われています。Seng Shilue（大宋史略）によれば、ゾロアスター教の教義を紹介するために、初めて正式に唐王朝を訪れたのは Helu（何禄）です。Helu（何禄）はソグド人で、ゾロアスター教の僧侶でした。彼は、僧侶としての厳しい修行を積み、自らの宗教について熟知しているはずです。ゾロアスター教の僧侶たちが、ゾロアスター教の古典を他の言語に翻訳し、伝道を行うことに熱心でなかったことはよく知られています。たとえ Helu（何禄）が、教義文書を携えていなかったとしても、彼の優れた語学力と僧侶としての徳の高さをもってすれば、唐の皇帝にゾロアスター教について伝えることができたはずです。このことからも、中国語の Suluzhi がソグド語の Zrušč を音訳したものだろうという推測が裏付けられます。

近年、福建省霞浦県で発見された民間信仰に関する文物から、Suluzhi に関する情報、具体的には、その伝道の経緯やその教えの核心部分に関するいくつかのキーワードが明らかになりました。このことから、霞浦県で発見された、いわゆる霞浦県文書におけるゾロアスター教に関する記述が作り話ではなく、何らかの事実に基づくものであることがわかります。これまでのところ、古代中国にゾロアスター教の聖典が翻訳されたものは見つかっていませんが、中世期にソグド語で書かれたゾロアスター教の古典に関心が集まっていたことを示す形跡は数多くあります。ゾロアスター教は主にソグド人によって中国に広がり、この宗教の歴史や教義を熟知した僧侶たちが、多くの情報を中国国内に伝えたことに間違いはありません。長い年月をかけて口頭で伝

承されそうした情報の一部が、宋王朝の明教による五仏崇拝の重要な基礎となり、やがて霞浦県文書を作成した人たちによって取り上げられたのです。以上に紹介した研究から、唐王朝時代のマニ教、ゾロアスター教、景教、そして元王朝時代のカトリック教など、長い間埋もれていた外来宗教の遺物が、霞浦県文書に数多く含まれていることがわかります。つまりこれは、中国文明があらゆる種類の外来文明を融合しているということを示しているのです。

キーワード： Suluzhi、ゾロアスター教、ソグド語、霞浦県文書

Memo

Suluzhi (苏鲁支): A Chinese Zoroastrian term and its new evidence

Zhang Xiaogui (Department of History, Jinan University)

【Abstract】

It is generally held that Xian Religion (祆教) spreading in medieval China originated from ancient Persian Zoroastrianism. However, there has been not any Chinese translation of zoroastrian scriptures till now, unlike Chinese Manichaeism and Nestorianism propagated during the same period. So we have to get more information about this foreign religion only according to the records outside the church. About the prophet Zoroaster of ancient Iran, Chinese Buddhist Zan Ning (赞宁) called him as Suluzhi (苏鲁支) in his Seng Shilue (僧史略, A Brief of Chinese Buddhist History in the Song Period) . There are various spellings in different languages about this Persian Prophet, transcriptions of which are following: Zaraϑuštrā in Avestan (both Old Avestan and Young Avestan), Zarduxšt in Pahlavi, Zarhušt in Manichaean Parthian, Zrušč in Sogdian and Uighur, Zōroastrēs (Zathraustēs、Zōroastēr、Zaratas and Zarades) in Greek. It is obviously that Sogdian Zrušč is nearly the same as the reading of Chinese Suluzhi. It is also said that the information about zoroastrian Prophet in Chinese should be from Sogdian sources. According to Seng Shilue, it was Helu (何禄) who firstly and officially came to the Tang court to introduce zoroastrian matters. Helu was a sogdian and a professional zoroastrian priest. He must undergo the rigorous priestly training and know very well about his religion. It is well known that zoroastrians are not keen to translate their classics into other languages and do missionary work. Even if Helu did not carry the teaching classics, he can succeed in introducing to Chinese Emperor about zoroastrianism by virtue of his excellent language ability and professional accomplishment. This is helpful to catch on the speculation which Chinese Suluzhi was transliterated from Sogdian Zrušč.

In recent years, some folk religious documents have been discovered in Xiapu in Fujian province, which contain some information about Suluzhi, especially some key words about its missionary history and the core of its teachings. It proves that Zoroastrian contents in the Xiapu manuscripts are not fictionally fabricated, but based on something. Although no ancient Chinese translation of Zoroastrian scripture has appeared so far, there are many traces of the popularity of Zoroastrian classics in Sogdiana in the medieval period. Zoroastrianism was mainly spread by the Sogdians, and priests who are familiar with the history and religious teachings will definitely bring a lot of information about the religion. Passed down orally through the ages, some of the information became an important basis for the worship of the Five Buddhas by the Ming religion in the Song Dynasty, and was later picked up by the makers of

the Xiapu manuscripts. The above-mentioned research fully proves that the manuscripts discovered in Xiapu contain many long-lost foreign religious relics, such as Manichaeism, Zoroastrianism, Nestorianism in the Tang Dynasty, Catholicism in the Yuan Dynasty, etc., indicating that Chinese civilization can melt all kinds of foreign civilizations.
Key words: Suluzhi, Zoroastrian, Sogdian, Xiapu manuscript

Memo

ゾーロストルかく語られき――『火教大意』(1883) の出版意図を探る。

中島　敬介
(奈良県立大学ユーラシア研究センター副センター長／特任准教授)

【要旨】

1883 年、洋の東西でゾロアスター（教）関連の書籍が発行された。

６月にドイツで『ツァラトゥストラかく語りき（Also sprach Zarathstra)』の刊行が始まると、期せずして９月、日本で林董（はやし・ただす）の口訳による『火教大意（かきょう・たいい)』が出版されている。

前者の内容はゾロアスター(教)とは無関係で、著者・ニーチェ(Friedrich Wilhelm Nietzsche）が持論（「永劫回帰」思想）を展開するにあたって、ゾロアスター（「ツァラトゥストラ」）の名を借りただけだった。ニーチェの目論見が成功したのは、当時のドイツでゾロアスター（教）がそれほど知られていなかったからだろう。

一方、後者の『火教大意』ではゾロアスター（「ゾーロストル」）自身のプロフィール、ゾロアスター教の教義・歴史が詳しく―しかも、今日でも通用するほどのレベルで―説明されていた。

ゾロアスター（教）に関する国内の一般知識がドイツと大して異なる程度ではなかったとすれば、後者『火教大意』を著した林の意図は、ニーチェの個人的才能や気質に由来する―それとは違ったもっと社会的な―ものであったはずだ。明治 16 年の『火教大意』は何を目的として著されたのか。

本発表では、『火教大意』の出版の意図や経緯を、

①出版時までの日本の宗教事情を含む社会状況の推移
②訳者・林董の経歴
③原書「世界の十大宗教（Ten Great Religions)」の趣旨
④著者・J. F クラーク（James Freeman Clarke）の宗教上の立場
⑤林の前著『馬黙哈伝（まほめっと・でん)』の執筆・刊行のいきさつ

などから遡及的に推論し、一定の仮説として、当時最大の外交（政治）案件であった条約改正や信仰の自由を巡る憲法制定の動きに関わっていたことを提示する。

Data

１．書誌概要

表　題：『火教大意』
筆　者：林董口訳／干河岸貫一筆記
出版地：日本・東京
出版者：干河岸貫一
出版年：1883 年（明治 16）9 月

装　丁：和装（和綴じ）
分　量：64 丁（上・下）

２．筆者の略歴

林董（はやし・ただす、1850－1913）

父は佐倉藩の蘭方医佐藤泰然。幕府御殿医林洞海の養子となる。慶応 2(1866)年に幕府留学生としてイギリスに留学。帰国後、箱館戦争に参加し、捕らえられる。明治 4(1871)年に明治政府に出仕し、工部省、香川県、兵庫県知事等を歴任し、24 年外務次官となる。その後、駐露公使、駐英公使となり、日英同盟の締結に尽力した。第 1 次西園寺内閣で外相、第 2 次西園寺内閣で逓信相として再度入閣し、一時外相も兼任した。

（引用元；国立国会図書館「近代日本の肖像」）

Memo

Thus is Spoken Zoroaster —Inferring the Purpose of the Publication of Kakyo Taii [An Outline of the Fire-Religion] (1883)

Keisuke NAKAJIMA (Nara-Eurasia Institute, Nara Prefectural University)

【Abstract】

In 1883, books related to Zoroaster and Zoroastrianism were published in the West and the Far East.

The first part of Also sprach Zarathustra [Thus Spoke Zarathustra] by Friedrich Wilhelm Nietzsche was published in Germany in June 1883. Shortly after that in September 1883, a dictational translation of Zoroaster's teachings by Tadasu Hayashi was published in Japan as Kakyo Taii [An Outline of the Fire-Religion].

In fact, the contents of Also sprach Zarathustra had nothing to do with Zoroaster or Zoroastrianism. The author, Nietzsche, just happened to use Zoroaster ("Zarathustra") as the protagonist's name in his book centered on the idea of eternal recurrence. Nietzsche's intention turned out to be successful perhaps because Zoroaster and Zoroastrianism were little known in Germany at that time.

Kakyo Taii, on the other hand, offers a description of Zoroaster's profile personal history and teachings, as well as the history of Zoroastrianism at a level of detail and accuracy that still stands up today.

Assuming that there was not much difference in the level of knowledge of Zoroastrianism among the general public of Germany and Japan, unlike Nietzsche, whose work was a manifestation of his personal talent and temperament, Hayashi must have had a more social purpose in writing Kakyo Taii. What was Hayashi's intent in publishing the 1883 book Kakyo Taii?

Perspectives for consideration:

(1) Trends in the social context including circumstances surrounding religions in Japan up to the point of the publication
(2) Backgrounds of the translator, Tadasu Hayashi
(3) Purport of the original work, Ten Great Religions by James Freeman Clarke
(4) The religious position of James Freeman Clarke
(5) Background of Hayashi's previous work, Mahomet-den [Life of Mahomet]

Based on the above perspectives, the purpose and background of the publication of Kakyo Taii will be inferred and presented as a hypothesis that it was related to the movements toward revising Japan's treaties with the Western powers and establishing a constitution ensuring the freedom of religion.

Data

１. Bibliography

Title: Kakyo Taii [An Outline of the Fire-Religion]

Translator: Translated in dictation by Tadasu Hayashi, transcribed by Kan-ichi Higashi

Place of publication: Tokyo, Japan

Publisher: Kan-ichi Higashi

Year of publication: September 1883

Binding: Japanese-style binding (watoji)

Page numbers: 64 leaves (128 pages), volume I and II

２. Profile of translator

Tadasu Hayashi (1850－1913)

Diplomat. Born in Chiba. Born in Chiba, the son of Taizen Sato, a physician practicing Dutch medicine for Sakura clan.. He was adopted as a child by Dokai Hayashi, a physician who served the Shogunate. In 1866, he studied in Britain as a student sent by the Shogunate. After returning home, he took part in the battle of Hakodate and was captured. In 1871, he started to work for the Meiji government, and successively held important posts including Industry Ministry and governorships of Kagawa and Hyogo Prefectures. In 1891, he became Vice-Minister of Foreign Affairs. Later, he served as resident minister to Russia and to Great Britain, and focused on the conclusion of the Anglo-Japanese Alliance. He served as Minister of Foreign Affairs in the first Saionji cabinet, and reentered his second cabinet as Minister of Communications, at which time he also temporarily served as Minister of Foreign Affairs.

(Source: Portraits of Modern Japanese Historical Figures, National Diet Library of Japan)

Memo

奈良県立大学ユーラシア研究フォーラム 2023

奈良でゾロアスター教

2023.11.25 ／奈良県立大学 3 号館

奈良県立大学ユーラシア研究センター編